

横田基地UH-1N「ヒューイ」ヘリコプターの歴史:機体69-6614号機

The history of Yokota Air Base's UH-1N Huey helicopters: Tail 69-6614

October 2, 2025

By Senior Airman Kayli Rodriguez

通称「ヒューイ」として知られるUH-1Nイロコイ。その特筆すべき歴史を紹介します。なかでも今年秋、横田基地に記念展示される機体69-6614号機について取り上げます。このヒューイは半世紀以上にわたり、数々の紛争や大陸を越えて米軍のさまざまな任務を支えてきました。

その歴史はベトナム戦争に遡ります。1970年11月21日、ベトナム共和国カムラン湾で、第20特殊作戦中隊(呼称:グリーン・ホーネッツ)が、UH-1N初号機を配備しました。単発エンジンの旧P型ヒューイに代わるこの新型機は、信頼性と火力が向上し、瞬間にその実力を証明しました。1971年1月20日までに部隊は全面的にN型へ移行し、ベトナム各地で危険な戦闘任務に挑みました。



わずか3か月で、部隊は670回に及ぶ戦闘任務を遂行し、累計2,881時間以上の飛行を記録しました。地上部隊を支援するため、7.62mm弾140万発以上、ロケット弾3,500発、40mm擲弾6,600発以上を使用しました。米陸軍特殊部隊のパトロール、搜索救難、さらには当時の在ベトナム米軍司令官クレイトン・エイブラムス大将の輸送も担いました。6614号機も、ヘリコプターが現代戦のあり方を変える歴史的転換期の時代に一翼を担いました。

ヒューイはまた、命綱として数多くの負傷兵搬送を担いました。ベトナムのバンメートでは、危険な夜間飛行に自らの意思で臨んだUH-1N乗員が悪天候の中、クレイモア地雷で重傷を負った兵士をカムラン湾まで搬送し、緊急脳外科手術へとつなぎ、命を救いました。

ヒューイの名は、常に英雄的かつ勇敢な活躍に結びついています。中でも、第20特殊作戦中隊ヒューイ操縦士のジェームズ・P・フレミング大尉の物語はそのレガシーを体現しています。彼はベトナム従軍中、6名の特殊部隊偵察チームが重武装の敵に包囲された際、危険を顧みず救出に挑み、名誉勲章・銀星章・殊勲飛行十字章を授与されました。

すでに一機が敵の激しい攻撃で撃墜されていることを知りながらも、フレミング大尉は仲間の命を自らの命より優先し、救援に向いました。並外れた操縦技術で川岸ぎりぎりに機体を操り、尾部を水面近くまで下げたままチームを待ち続けました。しかし、パトロール隊は敵弾でヘリに到達できず、一旦退避せざるを得ませんでした。燃料が尽きかける中、フレミング大尉は再び同じ危険な操縦を行い、敵弾が風防を貫いても退かず救出を試みたのです。

自らの危険を顧みず、フレミング大尉は一人たりとも置き去りにせず、パトロール隊員が到着するまで砲火の下で不動の姿勢を保ちました。パトロール隊がヘリに乗り込むと、敵の弾幕をかわし、安全な場所へと搬送しました。彼の勇気と仲間への献身は、職務の域をはるかに超え、米空軍が掲げる最高の価値観を体現していました。ジェームズ・P・フレミング大尉の勇敢さは、彼自身の人格のみならず、ヒューイ乗組員の不屈の精神を今に伝えています。彼らの勇気と犠牲は、ベトナムにおける米軍作戦の精神を象徴したのです。

戦後の1972年、6614号機は米国に帰還し、フロリダ州ハールバート・フィールドの第1特殊作戦航空団に配属されました。10年後の1983年から1985年にかけては、全く異なる任務に従事しました。南米からバハマ経由で米国へ流入する麻薬の流れを阻止する共同作戦「オペレーションBAT(バット作戦)」において、ヒューイは重要な空輸および監視支援を担いました。バハマ基地を拠点に、6614号機は数百回に及ぶ海上任務を遂行し、バハマ警察や米麻薬取締局(DEA)の捜査官を離島へ輸送し、密輸業者の摘発に貢献しました。これらの任務で、米国本土に到着する前に15億ドル(現在価値で約59億ドル)相当以上の麻薬や機材を押収しました。

1980年代後半には、6614号機はネバダ州へ移動し、インディアン・スプリングス(現クリーチ空軍基地)の核実験施設の運用支援も担当し、核物資の護送、警備チームの輸送、最悪の事態に備える乗員のサバイバル訓練支援などを行いました。

一方、太平洋地域でも新たな章が始まります。1980年1月23日、UH-1Nが横田基地に到着しました。部隊は通称「オリेंट・エクスプレス」として、渋滞する東京の空で迅速かつ安全な移動手段を提供し、将官や要人の輸送、患者輸送、搜索救難任務などを担いました。1986年の東京経済サミットではレーガン大統領スタッフを、1989年にはクエール米副大統領を輸送しました。1990年、空母ミッドウェイ火災時には、重度の火傷を負った水兵を病院へ緊急搬送し、医療搬送機としての活躍も示しました。

1993年10月1日、横田基地のヘリ部隊は第459空輸中隊として再編され、1995年に6614号機が正式に配備されました。以来、要人輸送から人道支援活動まで、幅広い任務を遂行してきました。特殊な任務では、2003年、生命維持装置付き保育器に収容された未熟児を横浜の病院から横田基地へ搬送する緊急任務を敢行したこともありました。緊急要請で準備時間が極めて限られる中、乗組員は悪天候の中、手描きの地図だけを頼りに、病院裏の野球場を臨時着陸地点として着陸しました。そこで待機していた日本の救急車に保育器ごと赤ちゃんを引き渡し、横田基地へ搬送しました。そして、待機していた航空機で赤ちゃんはカリフォルニアへ搬送され、救命治療が行われました。

2011年、6614号機は再び歴史の舞台の中心に立ちました。東北地方を襲った壊滅的な地震と津波の後、第459空輸中隊のヒューイは「トモダチ作戦」に出動しました。福島第一原子力発電所事故を受け、壊滅的な被害を受けた地域に放射能漏れの懸念が高まる中、米空軍は第459空輸中隊のUH-1Nを含む多数の航空機を派遣し、損傷した福島第一原発上空で偵察と低高度放射線測定を実施しました。24時間体制で続けられたこの任務は、日米双方の指導者が人命救助の決断を下すために必要な重要データを提供しました。被災地に救助隊を送り込み、人道支援物資を届け、汚染地域から海軍要員を避難させるなど、全体的な復旧支援活動のごく一部でありながら、リアルタイムの情報提供と重要な支援任務飛行は、日米両政府にとって極めて価値あるものでした。小規模な部隊でも、その活動は大災害のさなかで安定と希望をもたらしました。

1980年に横田基地に配備されて以来、第459空輸中隊のヒューイは、基地司令官から米国大統領、副大統領、国防長官、統合参謀本部議長に至るまで、来日する著名な要人輸送を支え、日米間の信頼の架け橋となってきました。その任務は数十年にわたり忠実に遂行され、同中隊が最後の要人輸送任務を遂行した2025年8月23日まで続きました。

退役を間近に控えたヒューイは、再び人命救助という最大の使命を果たしました。要人空輸任務を継続しつつ、主たる任務を航空医療搬送へ転換し、2023年12月15日、第459空輸中隊はUH-1Nエア・アンビュランス・プログラムを復活させました。その任務はシンプルでありながら意義深い、人命を救うことでした。中型輸送能力と比類なき信頼性を持つヒューイは、横田基地から関東平野一帯の医療施設へ患者を搬送。それから第459空輸中隊は、横田基地の軍人や家族だけでなく、全ての米国地位協定(SOFA)の人員、さらには年間15,000人以上の米海兵隊員が日本最大の実弾射撃場で訓練を行う諸職種共同訓練センターキャンプ富士を含む全部隊へ医療支援を拡大しました。かつて車で3時間以上かかっていた移動が、空路ならわずか30分で到達可能となり、この時間差が命運を分ける可能性がありました。

乗組員は年中絶え間なく24時間待機し、出動準備を整えていました。出動要請を受けてから、1時間以内に離陸可能な態勢を維持し、最も必要とされる局面で確実に任務を遂行しました。2023年にUH-1Nによる負傷者搬送任務が再開されてから、ヒューイは2023年12月28日の初出動から2025年8月21日の最終出動までの間に、15件の緊急患者搬送を行いました。

第459空輸中隊は2025年8月29日、最後の警戒任務を遂行しました。この任務をもって、ヒューイは横田基地での最後の章を閉じました。華やかさを排し、半世紀以上変わらず示してきた静かな勇氣と揺るぎない献身をもってその役割を全うしたのです。

ベトナムの密林から、カリブ海での麻薬取締、そして日本の空を飛行する最後の日まで、69-6614号機は兵士、外交官、患者、さらには新生児までも空輸してきました。この機体は、ガンシップであり、守護者であり、命綱でもありました。単なる機械を超え、歴史を見守ってきた証人であり、ヒューイのレガシーに受け継がれる不屈の精神を象徴しています。

